7月11日　「アブラハムへの約束」　聖書研究

テキスト　創世記 15章1〜21節

旅人アブラムへの神の約束の御言葉は、創世記12章1節以下と13章14節以下に続いて三回目です。「恐れるな、アブラムよ」と主の言葉がありました。12章後半からエジプトで妻を妹と偽る生活、甥のロトとの別れ、周辺の諸部族の戦いに巻き込まれることなどが続きます。不安定な旅人アブラムには、内・外から押し寄せる危険や苦々しい経験がありました。広い土地と多くの子孫を与えるとの約束（13:14〜17）はどうなったのでしょうか。神の約束への疑いもありました。アブラムは老齢の自分たちには子供は与えられないと思い、しもべエリエゼルが跡を継ぐものと考えました。15章は恐れや弱さの中にある人間アブラムにたいして、神の一方的な恩寵あふれる約束がテーマです。15章の約束も多くの子孫と広い土地についてでした。子孫については、はじめて夜空の星にたとえられます。公害のない古代社会にあっては、満天に輝く星はとても数えることができません。ついに「アブラムは主を信じた」のでした。そして「主はそれを彼の義と認められた」のです（15:6）。

この15章6節は、新約聖書でパウロやヤコブが信仰義認を語るときに、引き合いに出される御言葉です（ローマ4:3, 9, 22, 23、ガラテヤ3:6、ヤコブ2:23）。ヤコブの場合は、ただ信仰によって義と認められたというその信仰は、行いを伴うものであると言います。これはパウロの信仰義認に対立するものではありません。いずれにしても「義と認められた」というのは「神とのあるべき関係にある」と、神が認めてくださることです。このときのアブラムの信仰がどれほど深かったのかとか、確信に満ちていたのかということは記されてはいません。ただ信じたのです。「信じた」という言葉は、「アーメン」と語源を等しくするものです。真実であると確信する、信頼するなどの意味があります。神の約束の御言葉をアブラムはこのとき受け入れ信頼しました。彼は恐れや弱さに取り囲まれ、自分自身にも周りの状況にも、より頼むものを持ちませんでした。ただ神の約束の言葉に信頼するしかなかったのです。私たち信仰者の行いが生涯にわたって罪の腐敗・汚れのもとにあるのと同様、私たちの信仰もさまざまの弱さをもち続けます。ただ真実なことは神の御恵みです。

そういうアブラムに、神は約束のより確かな保証を与えられます。それがアブラムと結ばれた「契約」(15:18) でした。アブラムに対して初めて「契約を結んで」と言われましたが、その内容は創世記12章1節以下や13章14節以下の約束と同じものです。ただ未来に実現することの確かさと、契約実行の保証という点で際だっています。15章13節の「異邦の国」はエジプト、そこでアブラムの子孫は寄留者となり400年間の奴隷生活を送ります。出エジプト12章40節には430年とありますが、400年間というのは概数と考えてよいでしょう。その間、神の約束通りアブラムの子孫は、天の星のように（15:5）、大地の砂粒（13:16）のようになりました。契約実行の保証ということでは、15章9節以下に記されている奇怪にも思える儀式に示されました。雌牛、雌山羊、雄羊を二つにきり裂き、山鳩と鳩の雛も並べるように言われました。暗闇に覆われた頃、神の臨在の印としての、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎていきました。これは当時のオリエント世界の契約締結の儀式でした。その意味は動物の間を通る者が、もし契約を破ったならば、私はこの裂かれた動物のようにされてもよいということを表すものでした。驚くべきことにそこを通ったのは、アブラムではなく神ご自身でした。神の側の一方的な契約に対する誠実さ・真実さの現れでした。これはなんという驚きでしょうか。

（中根汎信）

7月11日　「アブラハムへの約束」　説教展開例

テキスト　　創世記　15章1〜21節
参照カテキズム　子どもカテキズム　問28

〔単元のねらい〕

「アブラハム契約」について学ぶ。旧約のアブラハムとの間に契約を結ばれた神は、イエス・キリストの父なる神である。恵みの契約において示された神の驚くべきへりくだり、またそこに示されている神の大いなる愛を心深く覚え、子どもたちとともに神をほめたたえたい。

「神さまのへりくだり」

聖書にはたびたび「契約」という言葉が出てきます。というよりも、「旧約聖書」「新約聖書」の「約」は「契約」の「約」です。つまり、聖書そのものが契約の書物であると言ってよいのです。

では契約とは何でしょうか。聖書では、契約とは神さまと人間との愛の交わりを言います。造り主なる神さまはわたしたち人間を深く愛してくださいます。わたしたちもまた神さまの愛にこたえて、神さまを愛して生きています。この愛の関係そのものを契約の関係と言うのです。

ただ、よく考えてみると神さまと人間との間に契約が成り立っていること、すなわち神さまと人間が出会い、おたがいに交わりを持つことができるというのは、不思議なことです。なぜなら、神さまは人間をはるかに超えておられるからです。神さまは天におられますが、人間は地にあるからです。天と地の間は、目もくらむほどにへだたっているはずです。

それなのに、なぜ神さまと人間との間に契約の関係が成り立つのでしょうか。その可能性はふたつです。ひとつは、人間が天高くのぼって、神さまと同じところに立つことです。けれども、人間にそんなことはできっこありません。

もうひとつの可能性は、神さまのほうで人間の低さにまでくだってきてくださることです。実は、神さまはこのことをなさいました。神さまはへりくだって、低くなられました。それゆえに、人間との間に契約を結ぶことがおできになったのです。そして、それは神さまが人間を深く愛しておられたからこそなのです。

そのことを、神さまがアブラハムとの間に結ばれた契約をとおして確かめてみましょう。

先週も見たように、神さまはアブラハムの子孫を海辺の砂、空の星のように増やすことを約束してくださいました。アブラハムとその子孫を豊かに祝福し、大いなる国民とするとおっしゃったのです。これが、神さまがアブラハムとの間に結ばれた契約の中身です。

そしてそのとき、アブラハムに次のようにお命じになりました―三歳の雌牛と雌山羊と雄牛をふたつに切り裂きなさい。そして、向かい合わせに置いておきなさい。

アブラハムがみ言葉のとおりにすると、神さまはアブラハムを深い眠りに落とされました。日が沈み、あたりが暗闇に覆われたころ、突然煙を吐く炉と燃えるたいまつが現れました。聖書では火は神さまがそこにおられるということのしるしですから、この炉とたいまつは、神さまご自身をあらわしています。

そして、その炉とたいまつとが、アブラハムがふたつに切り裂いた動物の間を通り過ぎていったのです。すなわち神さまが通り過ぎていかれた、ということです。

これが神さまがアブラハムとの間に結ばれた契約のしるしです。不思議だな、どういうことなのかな、と思うかもしれません。けれども、このし

るしにはちゃんと意味が込められています。

つまり、神さまはアブラハムにこのように誓われたのです―アブラハムよ、わたしはあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を増やし、大いなる国民とすると約束した。わたしはこの約束を必ず果たす。もしもわたしの側でこの約束を破るようなことがあったなら、わたしはあなたの手でこの動物のようにふたつに切り裂かれてもかまわない。

神さまの驚くべきへりくだりです。そして驚くべき、人間に対する真実です。このとき、このように誓われたのは神さまのほうだけで、アブラハムには何も求められませんでした。アブラハムは深い眠りに落ちていたのですから。

これほどまでの真実さで、神さまはわたしたち人間の命と人生とを祝福してくださるのです。それはわたしたちを愛しておられるからです。

アブラハムとの間に契約を結ばれた神さまの大いなるへりくだりは、ひとり子のイエスさまをまことの人となして世にお遣わしになったことに、さらに鮮やかに示されています。イエスさまにあって、まことの神さまはまことの人となられました。そして罪人のひとりに数えられ、十字架に死なれ、三日目に復活されました。それは神さまがみずからわたしたちの罪を贖い、わたしたちに永遠の命を与えてくださるためでした。

神さまはわたしたちへの愛ゆえに、へりくだってわたしたちのところに来てくださいました。わたしたちとひとつとなってくださいました。そしていつまでもわたしたちとともにいてくださるのです。

（木下裕也）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 3章16節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。
独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

7月11日　「アブラハムへの約束」　幼稚科

〈ねらい〉

アブラハムのように、なかなか信じられないときでも、神さまの約束を信じて、期待することができるように。

〈暗唱聖句〉

アブラムさんは、「主を信じた」。

〈展開例〉

今日もアブラムさんと神さまとのお話です。

①「主の言葉に従って旅立ったアブラムさんはカナンというところにつきました。すると神さまが現れて、「ここが約束の場所だよ」と言われました。アブラムさんは嬉しくて、そこに礼拝する場所を作りました。

②しかし、そこにはカナン人たちが住んでいたので、アブラムさんたちはさらに旅を続けました。その旅は厳しいものでした。飢饉があったり、戦争になったり、さらには」さらには一緒に旅をしていた甥のロトと分かれたりと、心が休まるときがありません。

③でも、アブラムさんは神さまに従っていったので、まわりの王さまたちからも尊敬され、大金持ちになりました。

④しかし、そんなアブラムさんには心配していることがありました。それは、アブラムさんには子どももいなかったので、「神さまはわたしを幸せにすると言ったのに、子供がいなくては財産がどれだけあったって幸せではない」。アブラムさんはそう考えていました。

⑤ある日、幻の中で神さまが現れてこう言いました。「恐れるな、アブラムよ。私はあなたを守る盾。あなたをかならず幸せにする」。でも、アブラムは悲しそうに言いました。「子どもがいなかったら、どんなにたくさんの財産があっても、わたしは幸せではありません」。

⑥悲しい顔をしているアブラムさんを、神さまは外に連れ出して言われました。夜の空にはたくさんの星が輝いています。神さまはやさしくアブラムさんに言われました。「アブラム。空を見てごらん。星がいくつあるか数えられますか」。アブラムさんは、「いいえ、とても数えられないくらいたくさんあります」。「そうだろ。わたしはあなたに約束する。あなたの子孫はこのようにたくさんになる」。

⑦アブラムさんはびっくり。まだ一人も子供がいないのに、こんなにたくさんの子孫が生まれるなんて信じられない。アブラムさんもそう思いかけました。でもアブラムさんは神さまの約束を信じました。神さまはそんなアブラムさんを見て、正しいことだと言って喜んでくださいました。

⑧それから、何度も空の星を見るたびに、アブラムさんは神さまの約束を思い出しました。そして、いつ神様はお約束をかなえてくださるのだろう。そう思うと毎晩が楽しくなりました。

〈お祈り〉

アブラムさんの旅を守ってくださってありがとうございます。アブラムさんは神さまの約束を信じました。私たちも神さまの約束を信じることができるように信仰を与えてください。アーメン。

7月11日　「アブラハムへの約束」　小学科下級

〈ねらい〉

神様の約束の意味を知り、神様は必ず約束を果たされるお方であることを感謝する。同時に、私たちも神様に従う子どもとして歩む。

〈はじめに〉

日曜学校の奉仕者のために祈りましょう。もしかしたら、奉仕者がもっと与えられたいと願っておられる日曜学校もあるのではないでしょうか。主に祈り求めましょう。主は必ず、必要な新たな奉仕者を与えてくださいます。共に子どもたちのために祈り、教え、救いに導くために労する方が与えられますように。すでに、共に奉仕している日曜学校教師の為にもお互いに祈り合い、支え合っていきましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①アブラハムには子どもはいましたか？

②神様はアブラハムを外に出して空を見るように言われました。そして、何を数えることができるかと言われましたか？

③夜空にある星を全部数えることはできますか？

④神様はアブラハムに星のようなたくさんの何をお与えになるとお約束されましたか？

⑤アブラハムはその約束を信じましたか？

〈展開例〉

お友だちとのお約束を毎日私たちはしていますね。学校でもお約束があります。お家でもあると思います。どんなものがありますか。もし、その決めたお約束を守れなかったとしたら、どうしますか。何か罰がありますか。

今日のアブラハムさんは、神様からのお約束が与えられました。これまでもアブラハムさんは、まだ見ていないところへのお引越しや大変なことがたくさんありました。でもアブラハムさんは神様を信じてきました。今日の聖書では、普通に考えたら、絶対無理と思うような出来事、アブラハムさんもサラさんもおじいさんおばあさんになっているのに、これから星の数のようにあなたがたに子どもを、またその子どもをたくさん与えますよ、という神様のお約束をアブラハムさんはいただいたのです。その神様のお約束に今度もアブラハムさんは「はい」と言って信じました。6節「アブラムは主を信じた」とあります。そして、土地を与えて子どもに継がせると約束されました。また、そのお約束が本当ですよ、神様は必ずこのお約束を守りますよ、というしるしを神様の方から、アブラハムさんに良く分かるように見える形でくださいました。神様は人間の本当かな？心配だな？ という気持ちをよく分かっておられる方ですね。

神様という方は、お約束を必ず守る方であることに信頼しましょう。何よりもイエス様をお与えくださったほどに私たちを愛してくださっている方だからです。

〈お祈り〉

神様、あなたを賛美します。私たちひとりひとりを愛してくださりありがとうございます。神様を信頼する思いを今週も私たちの心のうちにつくってください。

7月11日　「アブラハムへの約束」　小学科上級

〈ねらい①〉

神の約束に基礎付けられた、信仰者の希望を伝える。

〈展開例①〉

「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです」(使徒言行録2:38～39)。

私たちは、イエス様を信じるだけで、罪赦され、永遠の命を与えられます。絶対です。世界中のすべての人が、そんなこと赦さないって言ったって、ひっくり返ることはありません。だって神様が、聖書にはっきりと約束してくださっているからです。私たちの希望は、ただ神様の約束にだけあります。天地が崩れ去るときもありましょう。私たちの弱い心が、神様を信頼できずに揺れ動くこともありましょう。でも神様の約束は絶対に変わりません。

「約束してくださったのは真実な方なのですから、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう」(ヘブライ10:23)。

〈ねらい②〉

説教展開例に従い、契約を結んでくださった神のへりくだりのありがたさを伝える。

〈展開例②〉

先生の子どもの頃は、友だちと何かを約束する時に、「絶対？ 命かける？」と聞くのが流行っていました。今でも言いませんか？ いつもは冗談で、「おう、かけるよ。命かける」って、みんな軽く言っていました。でもある時、一人の友だちがとっても深刻なお話をして、その秘密を守って欲しいとお願いしてきました。そして「絶対？命かけてくれる？」と聞くのです。その時は、先生も他の友だちも、「うん、命かける」とは言えませんでした。真剣な約束だったからです。

神様が私たちと結んでくださった約束、つまり「イエス様を信じる者を救う」という約束は、真剣な約束の中でも、一番真剣なものです。僕たちが永遠の救いを得るか、永遠の滅びを味わうかが、この約束にかかっている。こんな大事な約束。「絶対、命かける」なんて簡単には言えません。でも神様は、この約束は絶対だと言われます。それを証明するために、命かけるどころか、一番大切な独り子イエス様の命を私たちに差し出してくださいました。私たちのために、いと高き神様がそこまでしてくださったのです。それほどの誠実が込められた約束なのです。

〈祈り〉

神様、あなたが命をかけて、救いを約束してくださったことに感謝をします。あなたの約束に、ひたすらより頼んで、いつも恐れず歩むことができますように。

7月11日　「アブラハムへの約束」　中学科

〈ねらい〉

契約に込められた神様の愛に感謝する。

〈展開例〉

①先週はアブラハムの召命から、神様が私たちを呼び出したのは、私たちを祝福したかったからだと知った。今日は、神様がどれほどに私たちを祝福したいと思われているかについて覚えたい。

Q．先週から「祝福、祝福」と言っているが、皆は、その意味を知ってるだろうか？ 祝福ってどんな意味？「祝福」というのは「神様の愛によって恵みを与えられる」という意味。だから「皆が神様から祝福される」とは「皆が神様の愛によって恵みを与えられる」ということ。

②小さいときから教会に来ている人は、ひょっとしたら「神様は君を愛している」という言葉に慣れっこになっているかもしれない。だけど、本当はこれはあり得ないこと。世界のトップスターがいきなり「君と友だちになりたい。そのために君と友だちになる約束を交わそう」、こんなことを言ってきたら君は戸惑うだろう。神様が君と愛し合う関係を求めているというのは、それよりも遥かにあり得ないこと。

③今日の説教で神様はアブラハムと契約を結んだ、と言われていた（18節）。契約というのは神様が皆のことを大切にして、接し続ける、という約束。なんで、神様は皆のことを大切にしようとするのか。理由なんかない。神様が君と一緒に生きていこうと決められたから。ただそれだけ。トップスターと友だちになるには、君がどれだけ願ったとしても相手がやって来なかったら永遠に、相手と知り合いになることはない。嵐やAKB48が君たちと友だちになりたいかどうかは知らないが、神様は人間と一緒に生きていくことを望まれた。そのためには神様の方から君たちに近づくしかなかった。そして、人間と神様が、そんな途方もない関係を持っているということの証拠として、契約を下さった。

④これだけでも、あり得ない話だが、これだけじゃない。神様が君たちと一緒に生きていきたいという思いは、その契約の儀式に、これまたあり得ない形で現わされた(9節～10節。17節朗読)。これは、当時の習慣で「約束を破ったら自分が真っ二つにされても仕方ない」という強い誓いを現わす儀式。神様はこれほどの思いをもって君たちを祝福することを願っている。そして、神様は自分の愛する独り子であるイエス様を犠牲にしてまでも、君たちと一緒に生きて、君たちを祝福することを求められた。君たちが教会で聞き続けている「神様は君を愛している」という言葉は、あり得ない相手のあり得ない歩みよりとあり得ない思いによって成り立っている、あり得ない約束だということに、驚きと感謝を覚えたい。

⑤ただ、神様は君たちを幸せにする仕方にこだわりを持っている。それは、神様が約束し、相手がそれを信じて従うというプロセスを踏むこと(6節)。神様はこういう方法も込みで、君たちと幸せを満喫することを願われている。「神様はその独り子をお与えになったほどに君を愛された。」それは「独り子を信じる君が滅びることなく、永遠の命を得るためである」この驚くべき愛の約束を信じて、祝福された一週を求めたい。

〈祈り〉

約束をくださり、それを守ってくださる神様。あなたの約束を信じて、あなたの祝福に感謝してあなたと毎日を過ごせますように。アーメン。